

ぐんまの「魚道」を考える（3）

【魚道入口問題（堰下流に突出する魚道）】

新潟の小河川の海に近い小さな淵では、十月中旬頃に産卵を控えた錆びたアユの群れが良く見られるようになります。やがて、河口の波打ち際には生涯を終えたたくさんのアユが見られます。

さて、今回は魚道入口が堰の下流に突き出した魚道を考えてみました。
写真は烏川の長野堰です。（上 2005 年 3 月撮影、下 2005 年 5 月撮影）

堰を越流する時



堰を越流しない時



下の写真のように川の水が少ない時は、魚道部だけ水が流れるため遡上する魚は魚道に入りません。しかし、上の写真のように川の水が少し増えると、写真の左側（右岸側）に魚は遡上するようになり、魚が魚道に入りにくくなります。その結果、魚は右岸側の堰下流直下に集まり、遡上

出来なくなります。平成 18 年初夏の長野堰では、天然遡上アユの大きな群れが堰の下流で滞留して、大きな問題となりました。

この様に魚道が設置されていても、魚道の入口を見つけられないで、遡上出来ない状況が多くの魚道で見られ、“魚がのぼらない魚道”と言われることとなります。

長野堰は、魚道入口が堰から大変離れた下流にあります。建設当時からこの様に下流に長く突き出ている訳ではありません。洪水時に堰の下流の河床が大きく低下したため、過去 2 回魚道を下流に延ばしたようです。この結果として、魚道の延長が当初の約 20m から 70m と長くなり、魚道の入口問題が発生したのです。

この下流に突き出した魚道の対策としては、

- 1) 魚道入口に魚を誘導できるような壁を設置する。
- 2) 魚道を下流に延長する計画時に、上流へ折り返す案を採用し、堰直下流を入口とする。
- 3) 魚道入口付近に明確な水の流れをつくり、魚を集める工夫をする。(呼び水式)

これらの対策は、現地の条件を考えて決めるのが良いと思います。

誘導する壁を設けた例を下の写真に示します。(神流川筋合口堰)



(日本一のアユを取り戻す会 福田睦夫)